

厳原町文化財調査報告書第3集

かね いし じょう
金 石 城

1995

長崎県厳原町教育委員会



金石城



Fig. 1 磐原町位置図

発刊にあたって

金石城跡は、過去4回城内の各種施設整備に伴う事前調査等の発掘調査を行い、これまでに中世～近世の遺構・遺物が検出され、館跡の変遷が概略認識できるまでに至っています。

今回の調査は、平成2年度から実施中であった、金石城跡の公園化事業「城下町厳原拠点整備事業」の工事中に城跡北西隅の櫓門跡から石敷遺構が発見されたことから緊急に調査を実施したものです。その結果、櫓門周辺から文化年間（1804年～1817年）に作成された城郭古絵図に一致する遺構が確認されました。

今後、発掘された貴重な資料を単に珍しいものとしてとらえるのではなく、私どもの祖先が日々として続けてきた、たくましい活動と進取の気性を学びとる必要があるとおもいます。

本書が文化財の保護及び学術研究の資料として、ご活用いただければ幸甚に存じます。

調査にあたって、大変多忙の中調査を担当いただきました県文化課の町田利宰文化財保護主事、村川逸朗文化財保護主事の多大なご指導ご協力と、お世話いただいた地元関係者の皆様に、深甚の謝意を表して発刊のごあいさつといたします。

平成7年3月

厳原町教育委員会

教育長 植 村 忠 光

例　　言

- 一 本書は長崎県下県郡戸原町所在、金石城跡整備の伴う発掘調査の報告書である。
- 二 調査は平成4年度と5年度に実施したもので、戸原町教育委員会が事業主体となり、県文化課が調査を担当した。
- 三 調査関係者は別項に記したとおりである。
- 四 本書の執筆、編集は県文化課高野晋司が行った。
- 五 本書関係遺物は報告書刊行後は戸原町教育委員会へ移管の予定である。

本 文 目 次

一 調査に至る経緯とこれまでの調査結果.....	1
二 金石城の歴史的・地理的環境.....	4
三 調査概要と出土遺構.....	7
四 出 土 遺 物.....	8
五 ま と め.....	14

挿図目次

Fig. 1	鐵原町位置図	
Fig. 2	金石城位置図	3
Fig. 3	金石城と清水山城古図	5
Fig. 4	金石城古図	6
Fig. 5	土器実測図	8
Fig. 6	遺構実測図	9
Fig. 7	瓦実測図	11
Fig. 8	瓦実測図	12

図版目次

PL 1	遺跡遺景と近景	15
PL 2	各種遺構検出状況	16
PL 3	各種遺構検出状況	17
PL 4	調査風景	18
PL 5	出土遺物(瓦)	19
PL 6	出土遺物(瓦、陶磁器)	20

一 調査に至る経緯とこれまでの調査結果

遺跡整備にかかる発掘調査以前に金石城の調査はこれまで3回実施されている。以下その概要を記しておく。

① 長崎県歴史民俗資料館建設に先立つ範囲確認調査と緊急調査

試掘調査 昭和51年1月26日～2月6日

本調査 昭和51年4月12日～6月14日

長崎県立対馬歴史民俗資料館建設に先立って実施されたもので、位置的には金石城北東部の一段高くなった平坦部にあたる。調査の結果、城の石垣・排水溝・カマド跡等が検出された他、遺物として各種陶器類、煙管、鉄鍋、簪、瓦片、骨製漁網用補修針等が出土している。

文化年間の金石城絵図によると、当該地は仲間部屋相当位置にあたっており、日常的な生活の場であったことが遺物の面からも証明されている。

なお、調査の結果を基に、建物全体を高床式に設計変更することで遺構面は覆土の上そのまま保存してある。調査面積は356m²である。

② プール建設工事にかかる範囲確認調査と緊急調査

試掘調査 昭和56年9月29日～10月12日

本調査 昭和56年12月2日～12月17日

大手門から入って北側に位置した平坦地で、西、北、東側を城壁によって開まれた伸形部に比定された場所にあたる。プール建設に先立ち範囲確認調査と一部緊急調査が行われた。遺構としては排水溝や水溜め遺構などが検出されたが、時期的には金石城築城以前の遺構ではないかと推測されている。調査面積は57m²である。

③ 体育館建設工事にかかる範囲確認調査と緊急調査

試掘調査 昭和57年9月6日～9月30日

本調査 昭和57年10月1日～12月4日

町営体育館の建設工事にかかる発掘調査で、試掘調査でおおまかの遺構を確認した後、工事にかかる部分について本格的な調査を行った。

出土遺構としては文化年間に描かれた金石城に合致した、東西方向にはほぼ並行する石垣・排水溝や井戸等を検出した他、出土遺物としては国産陶磁器に加え、流通以前の多量の高麗茶碗の出土と朝鮮系瓦の出土が注目された。

このような遺物が対馬において発見されることは両者の交流の歴史からながめた場合当然とも言えるが、特に黒跡原でしか見られないような半製品を含む資料が多い高麗茶碗の出土は、当時の日本で流行した茶会での高麗茶碗の要請と流通に対馬宗氏が深くかかわってきた事を示す資料として注目される。

最終的な調査面積は2,400m²であったが、体育館の建設にあたっては、遺構の保存を配慮して高床式の設計に変更することになった。

以上がこれまでにおける金石城の調査経緯である。

今回の調査は、これまでの緊急調査と異なり、国史跡として答申された金石城跡の整備計画の一環として実施されたもので、今後は史跡整備委員会による整備計画の立案と指導によって継続して実施される予定である。4回目となる調査も正確には2回に分けることも可能であるが、同じ目的の調査であることを考慮してこれまでと同じく一括して取り扱っておく。

その調査期日と関係者は以下のとおりである。

調査主体 厳原町教育委員会

調査員 長崎県教育庁文化課 町田利幸

同 村川逸朗

厳原町教育委員会 小島武博

厳原町総務課嘱託 金洪源（現大韓民国釜山市立博物館）

調査期日 平成4年7月1日～7月8日

平成4年8月24日～9月1日

調査面積 460m²

註1 長崎県教育委員会「金石城跡緊急発掘調査報告書」長崎県文化財調査報告書 第33集 1977

2 厳原町教育委員会「金石城跡」嚴原町文化財調査報告書 第1集 1985

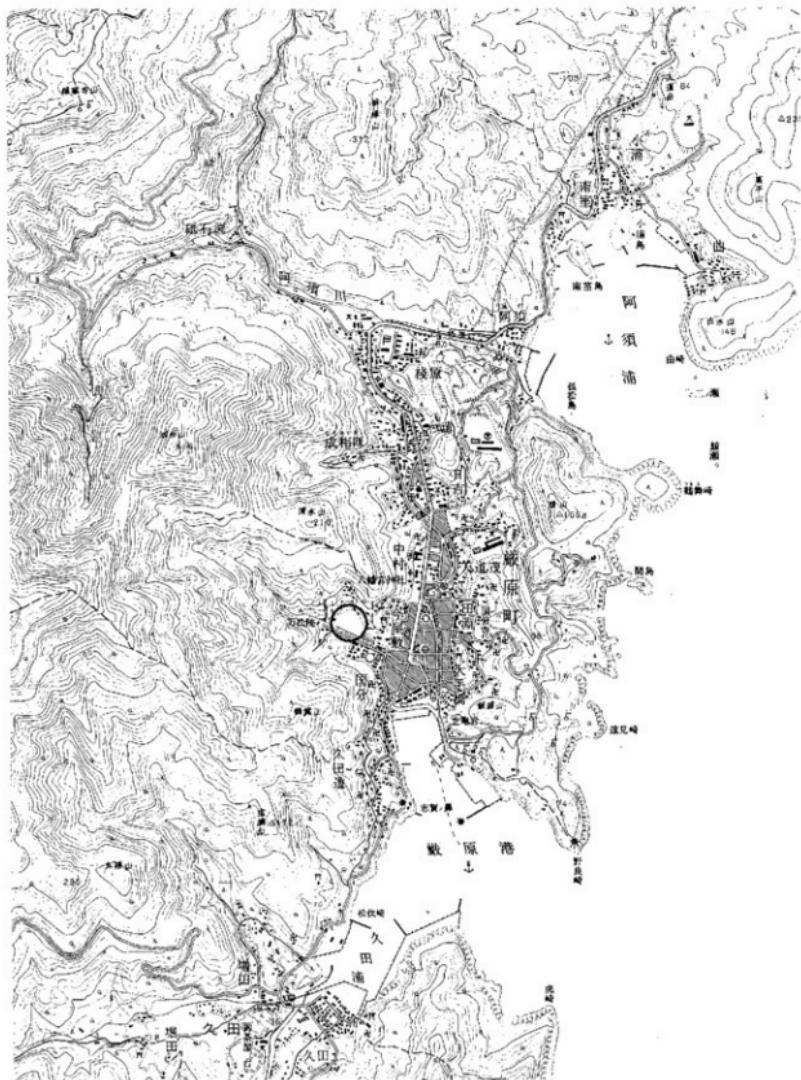


Fig. 2 遺跡位置図

二 金石城の歴史的・地理的環境

『宗氏家譜』によれば享禄元年(1528)島主宗将盛は旧居宅を宗一族の内紛によって消失し、新たに金石の地に構築したのがその開始とされる。

この地は、古代においては国府推定地とされる場所の隣接地であり、また文明年間(1470年頃)復興したとされる対馬鷲分寺があつたとされる場所であるが、既に機能していなかったのであろうか、鷲分寺は当該地の東に位置する日吉の地に移転されている。

金石城は当初金石屋形と称されていたが、後、櫓門や多門櫓等を設けるなど城郭として整備され、延宝6年(1679)、18年の歳月をかけて築城した棟原城にその居を移すまで150年余対馬国守の館として存続した。

金石城は巌原町大字今畠敷に所在する。西側と南北は山に囲まれ、その間の狭い空間に城は位置する。この内、北側に位置する標高206mの清水山は、後に豊臣秀吉による朝鮮出兵の隊本營として築造された経緯を持つ。南には狭小な金石川が流れるが、自然の堰の役目を果たしているものと思われる。なお、西側裏山には宗家の菩提寺である万松院^{註1}と宗義智以下歴代の藩主と夫人の靈が祀られている墓所があり、その静寂且つ壯麗な佇まいは、幕府と李朝との間にあって常に外交の最前線で苦惱し続けた宗家の歴史の重さを痛感させる場所として一見の価値がある。

金石城を描いた2種類の古地図と現在考えられている城の範囲から判断すると完成された城の面積は約40,000m²と思われる。

ただ、2種類の古絵図は描かれた時期が異なるのか、城内の建物の配置や規模に違いがある。1枚は文化年間に描かれた金石城絵図で、城内の殆どの建物や心字池までが描かれているが、もう1枚は清水山城図で、この図には、城内の櫓や主要館のみが描かれその他の建物は描かれていない。描いた時にそのような建物や池はまだ無かったのか、あるいは清水山城に主眼をおいた結果、関係ない遺構の細部まで描く必要がなかったものであろうか。

註1 1985年 国史跡に指定宗義智以来の藩主とその正室等の墓碑が祀られている。

2 長崎県立対馬歴史民俗資料館蔵



Fig. 3 金石城と清水山城古図

Fig. 4 文化年間の金石城



三 調査概要と出土遺構

整備調査に伴う発掘調査であることは前述したが、今調査の発端となったのは、「城下町蕨原拠点整備計画」事業実施中に城跡北西隅の櫓文跡から石敷遺構が発見されたことで、これを契機として当該地周辺について遺構の確認調査を併行することとなった。

調査の結果、古絵図に描かれた櫓跡とそれに続く石垣にはほぼ一致する各種遺構が検出された。

まず、櫓跡については、その現存している西側の櫓は基底部幅28尺平方、上面は20尺平方の広さになっている。これに対し、既にその上部は消失しているが、東側櫓の基底部幅は東西23尺、南北22尺とやや小さい。両櫓の間の石敷きは23尺平方程の広さを持っており、1.5～2.5m程の板状石を敷きつめている。中央部の石敷が抜き取られているためか、門跡等の遺構は確認されていない。(Fig. 6)

東側櫓には幅4mの階段が北側から設置されており、これも古絵図に描かれているとおりである。

門を抜けるとその全面に長さ60尺、幅6尺の石垣が南北に横たわるが、現存資料ではその高さは不明である。この石垣は南北に築かれた後、東側に60°の角度を持って折れ曲がって城内に誘導しているが、石積み方法に違いがある箇所があり、石垣の継ぎ足しも認められるようである。なお、石垣を築くにあたっては、まず地山を造成した後、玉砂利や瓦等の他10cm程度の礫を敷きつめた上に80～100cm程の石を両面に配置して形を整え、その空間に40～50cm程の石を充填している模様である。

以上、発掘結果と古絵図に描かれた遺構の配置状況はほぼ一致しており、城跡を整備・復元する上で非常に重要な資料を提供したことになろう。

四 出 土 遺 物

今回の発掘調査地点からはあまり遺物出土していないため、従って図示できる資料も少ない。

出土遺物としては陶磁器、瓦片が見られるが、陶磁器片は明治以降から現代の焼き物までが混在している状況であり、城に伴う遺物としては瓦片が大部分を占める。ここではこれらの内で主な資料について若干の紹介をしておく。

① 陶磁器 (Fig. 5)

1は高台径が17cm、胴部径21cm、器壁の厚み1.5cmの大型の磁器である。外面には全面に、内面では見込み部分にのみ薄い飴色の釉薬がかかる。外面には全体に貫入が見られ、胴下部には呉須による「…焼」の文字が描かれている。

2 陶器底底部である。高台径5.6cm、生地は薄い茶褐色で全体に白釉がかかる。

以上の資料は対馬で焼かれたものであろうと思われるが判然としない。

② 瓦 (Fig. 7, 8)

瓦も小片まで入れると比較的多く出土しているが、図示出来る資料はそれほど多くない。

瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦及び軒丸瓦と軒平瓦を併せた所謂軒棧瓦に分類される。

1～8は軒丸瓦である。何れも三巴文で珠文数や、その大きさ、あるいは巴の尾の長さ等によって数種類に分類できる。

1は珠文が9個しかないタイプである。瓦当径は15.2cmで、珠文・巴文共に浅く扁平である。外区は無文で低く、幅は1.8cmから2.2cmと一定しない。巴の頭部分は大きく、比較的短い尾が時計と逆回りに巻いている。色調は暗灰色で焼成は良い。胎土に若干の雲母を含んでいる。

2は瓦当径16.2cm。内区に大きく高い珠文16個と、大きく高い三巴文を巡らしている。尾は長いが他の巴文に接するまでには至っていない。無文の外区は高さ8mmで幅2.3cmを計る。色調は濃灰色で焼成は良く、胎土も精選されている。

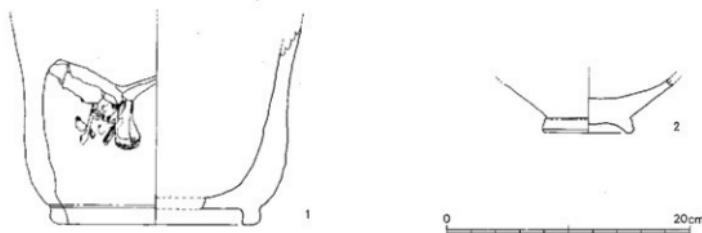


Fig. 5 陶磁器実測図

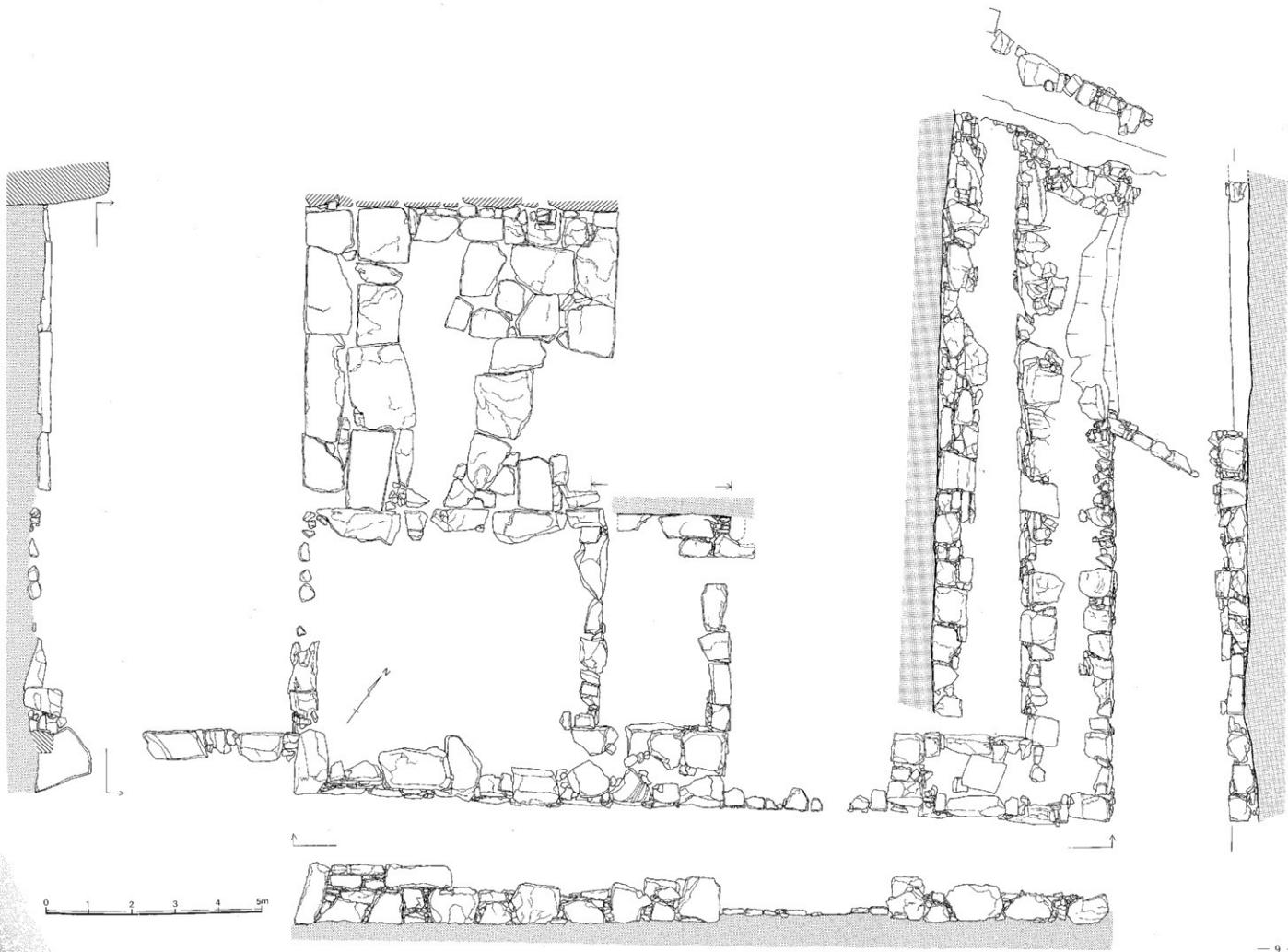


Fig. 6 造構実測図 (1/80)

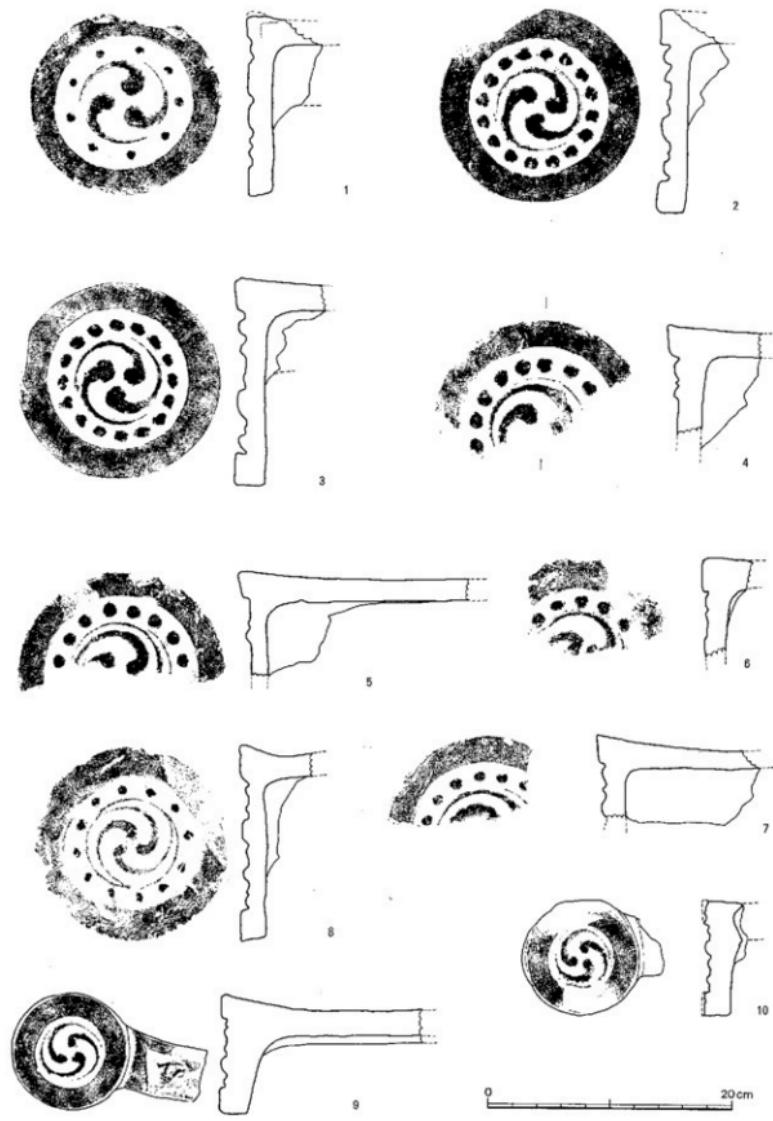


Fig. 7 瓦实测图①

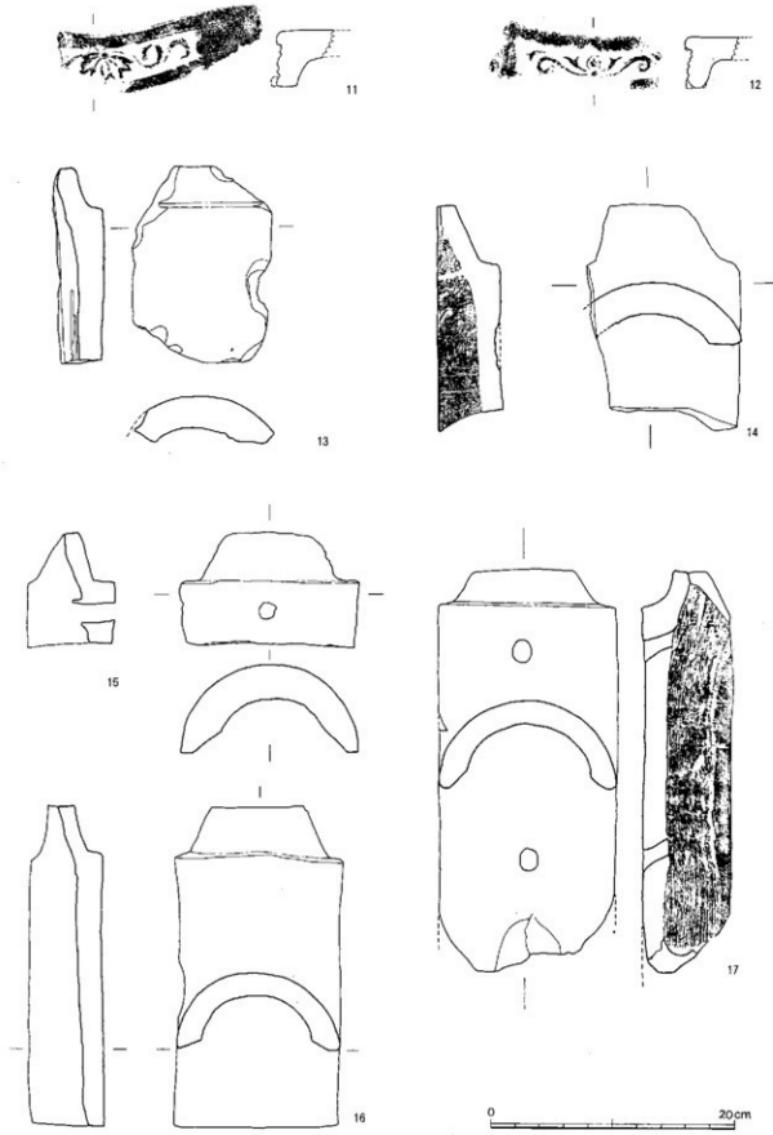


Fig. 8 瓦实测图②

3は瓦当径16.2cmで内区に16個の珠文と大きく長い三巴文を配する。色調、胎土共に2と良く似ているが同范ではない。

4は半分しか残っていないが、復元瓦当径は18cm径にならう。内区には比較的低い扁平な珠文16個と三巴文を配している。巴の尾は細く長いが他の線とは接しない。暗灰褐色で焼成は良好で胎土も精選されているが器面の剥落が顕著である。

5は半載資料であるが、丸瓦部分が良く残っている。瓦当径は16.8cmで最も大きい部類に属する。内区には比較的低い16個の珠文と三巴文を配されているが、巴の尾は細く長く、殆ど他の巴文に接するが如きである。淡灰色で焼成は良く、胎土も精選されている。

6 1/3個体しか残っていないが、瓦当は復元径20cm前後の比較的大型軒丸瓦である。内区には低く扁平な珠文16個とやはり低い巴文を3個配している。色調は淡灰色で焼成は甘く全体的に摩耗が見られる。胎土には微細な雲母が含まれる。

7もやはり1/3個体しか残っていない。色調、特長共に6に似ている。

8 瓦当面15.5cmの軒丸瓦である。内区には低く扁平な12個の珠文と尾の長い三巴文を配するが、尾の先端は他の巴文に接するため、あたかも円錐を構成するような形になっている。器壁は1.8cmと薄く、胎土には雲母と石英粒を含む。裏面下半部には指揮痕が顕著である。

以上、軒丸瓦を概観すると、巴文の尾が接しないタイプのものと尾が接するタイプのものに分かれようである。それらの特長については、後者は瓦当径が大きい反面文様の作りが全体的に浅いという特長と、范木押えの際、前者の場合は裏面調整がハケ目であるのに対して後者は指揮によっている。それらの差について時期差として捉える考えもあるがまだ資料の蓄積が必要であろう。

9、10は桟瓦である。9は9.3cmの瓦当に軒平瓦が接合されている。瓦当は三巴文で珠文はない。

軒平部は一部のみであるが、中心飾りから派生した子葉の一部が見られる。焼成は良好で胎土は精選されている。瓦全体の大きさは不明である。前面は化粧土でも塗布したのか白色を呈する。

10は軒丸部に一部だけ軒平部が付く資料である。瓦当径は9cmで内区に三巴文を配する。やはり珠文はない。表面は9と同じく白色を呈する。

11、12は軒丸瓦であるが、あるいは軒桟瓦の可能性もある。

11は宝珠形の中心飾りを持つ軒平瓦である。暗灰色で焼成は良い。

12は菊花状の中心飾りと唐草の子葉を持つ軒平瓦である。焼成は良く、表面には研磨を施し、にぶい銀色を呈している。

13~17は丸瓦である。何れも玉縁を有する。

13は1/3個体しかない丸瓦である。黒灰色で胎土に若干の金雲母を含む。凹面には布袋目を棒状原体圧痕が見られる。

14は径が15cm程の丸瓦で、筒部の曲線から推定すると3分割成形によるものと思われる。色調は暗灰色で焼成は良い。凹面には布袋目と粘土板から切り離す際の横筋痕がある。側縁はヘラ削り調整を行って平坦に仕上げている。

15は玉縁部のみ残る丸瓦である。黒灰色で胎土は精選され焼成も良い。凸面肩部から裏面にかけて穿孔が見られる。凹面には布袋目が観察される。瓦の径は14.5cmで筒の曲線から推定すると2分割成形と思われる。

16は完形の丸瓦である。長さ26.3cm、幅13.5cm、厚さ1.9cmで、玉縁部は長さ3.8cm、厚さ1.2cm、重量1.4kgを測る。筒半径は4.5cmで2分割成形である。色調は鈍い銀色で胎土には金雲母を含む。焼成は良好である。凸面は筒部玉縁部共にヘラナデ調整を行う。凹面には布袋目や布目痕が残る。側縁部はヘラ削りによって平坦部を作り出す。

17は現存長33cm、幅14.7cm、厚さ2cmで、玉縁部の長さは3cm、厚さ1.2cmである。重量は現存で1.75kgであるが、ほぼ完形に近いところから2kg前後と思われる。色調は鈍い銀色であるものが火を受けているため一部を残して茶褐色に赤変している。胎土には金雲母が含まれ、焼成は良好である。凸面部には2箇所に穿孔が見られる。成形は、2分割後側縁部をヘラ削りにより平滑に仕上げる。型取の桶には布の上に更に藁状の覆いを施している。

五 ま と め

前述の如く、金石城は享禄元年（1528）に築城され、延宝6年（1679）棟原城に居を移すまで150年余の間対馬国守の館としてその機能を果たした。

これまでの調査によると金石城の造構の時期については下記の3時期に区分されている。

第Ⅰ期 享禄元年（1528）建設の金石城（館）以前の造構

第Ⅱ期 金石城（館）に造構、つまり享禄元年（1528）～延宝6年（1679）の造構

第Ⅲ期 対馬島農会による大正11年の産業講習所の造構

今回調査結果によれば、まず、比較的大きな石を腰石として等間隔に据え、その間に小振りの石を充填するという石垣の構築方法は第Ⅱ期のものに共通している。

次に出土瓦の特長については製作技法、胎土、焼成、色調から若干の時間差を感じられるが、17世紀初め頃考案されたという棟瓦が含まれており、使用時期の一端がその時期にあることが分かる。

今回調査地点は、城の西南隅にあたり櫓門が描かれている。この門は位置的に見て宗家菩提寺である万松院への通路であることが考えられ、当然金石川を渡る橋が架かっていたはずであるが、現存する2枚の古絵図には見られない。古絵図の1枚は文化年間に描かれたとされており、その時期には既に取り払われていたことが推定される。

万松院は元和元年（1615）、宗家19代藩主、宗義智が築城した天台宗の菩提寺である。

先の櫓門がこの万松院関連の造構であるとすれば、この造構の築造時期は17世紀前半ということになり、第Ⅱ期の造構である証拠となる。

註1 厳原町教育委員会「金石城跡」嚴原町文化財調査報告書 第1集 1985

PL. I 遺跡遠景と近景



清水山城より見た金石城跡



北側より見た発掘区域



東側から見た柵跡

PL. 2 各種造構検出状況



石垣検出状況



堆積検出状況



石垣検出状況



石垣検出状況



石垣検出状況

PL. 3 各種造構検出状況



樁と石敷



樁と石敷



門跡石敷



同 上

PL. 4 調査風景



調査風景



調査風景



調査風景



石垣検出状況



瓦出土状況



1



2



3



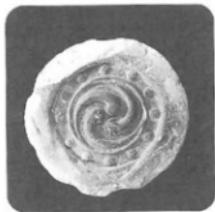
4



5



6



8



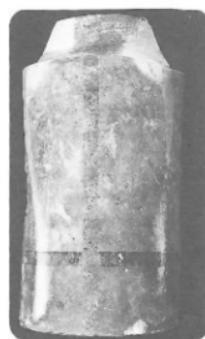
7



9



10



報告書抄録（記載様式）

ふりがな	かねいしじょうあと						
書名	金石城跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	厳原町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第2集 3						
編著者名	高野 晋司						
編集機関	長崎県教育委員会						
所在地	〒850 長崎県長崎市江戸町2-13 Tel 0958-26-5010						
発行年月日	西暦 1994年 3月 30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
金石城跡	下県郡 いげんぐ 厳原町	42441		34度 12分	129度 17分 20秒 19920701～ 19920708 19920824～ 19920901	460m ²	史跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
金石城跡	城跡	江戸時代	櫓、石垣、石敷	瓦 陶磁器			

長崎県戸原町文化財調査報告書第3集

金 石 城

平成6年(1994)3月31日発行

発行者 戸原町教育委員会
下県郡戸原町大字国分1441
〒817 ☎09205-2-1211

印刷所 昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007-2
〒854 ☎0957-22-6000